

産官学民同時テーマになってきたギャップイヤーの魅力

近頃よく聞く“ギャップイヤー”って何？

一般社団法人 日本ギャップイヤー推進機構協会 (JGAP) 代表理事 砂田 薫



参加者は若者を中心に

今年6月13日に東京・広尾でJICA(国際協力機構)・JGAP他が主催し、ギャップイヤー啓発シンポジウムが開催された。そこには、大学生や高校生を中心とした若者や大学関係者・関心ある一般社会人など300名を超える参加者があった。それは、大変な盛況であった。

3日後の16日に、経団連は「グローバル人材の育成に向けた提言」、同月22日には政府の「グローバル人材育成推進会議」は「中間まとめ」をそれぞれ発表したが、共通のキーワードがあった。それは、ギャップイヤー(以下GY)の導入を提言したり、推奨しているのだ。

そして、7月1日に新聞各紙が一斉に好意的に伝えた「東大が全学秋入学と半年(4-9月)ギャップイヤーの2点セット検討」と続く。10日には、今度は「2011年版厚生労働白書(厚労省)」が発表されたが、ここでも、大学を卒業しても仕事がなく、若者の高学歴化が必ずしも就職につながっていない現状も指摘し、それに併せて、早い段階から学生の職業観を養うため、「ギャップイヤー」の導入が有効だと提言している。

わずか30日間に、GYは民を皮切りに、産官学で大きなテーマになった。これほど、短期間にしかも主要セクターで議論されるテーマになるGYって何だろう。

経団連の記述ではGYを「英国等では、大学入学前もしくは卒業後に、学生がGYを取得し、一定期間(通常1年間)を、国内外でボランティア活動や社会貢献活動をして過ごすこと」と紹介しているが、エッセンスでいうと、「親元や正規の教育から離れた非日常化下の社会体験(ボランティアと正規外の国内外留学)と就業体験(インターンシップ)」となる。それは、教室内や座学では得られない体験を若いうちに一定期間立ち止まって行い、今後の人生や進路を考える、あるいはじっくり向き合う「青春の麦踏み期間」と呼ぶべきものである。しかし、一見「ゆとり教育」への回帰のように聞こえるかもしれないが、それは明らかに違い、受験で脇目を振らず、オン状態だった受験高校生(例・現在東大入学者は中高一貫校出身が5割)や「就活」で疲弊した大学4年生(また、職歴なき既卒未経験者・卒業3年未満退職者)が主体になるべきで、基本は希望者のためのものだ。再学習を要する習熟レベルの生徒や学生は、対象外といってよい。最近では欧米では概念が広がり、期間は1年に限らず、3ヶ月から2年、学部内や卒業後でも適用するようになってきた。それは、1年や2年の休学を要するケースもあれば、秋田県にある

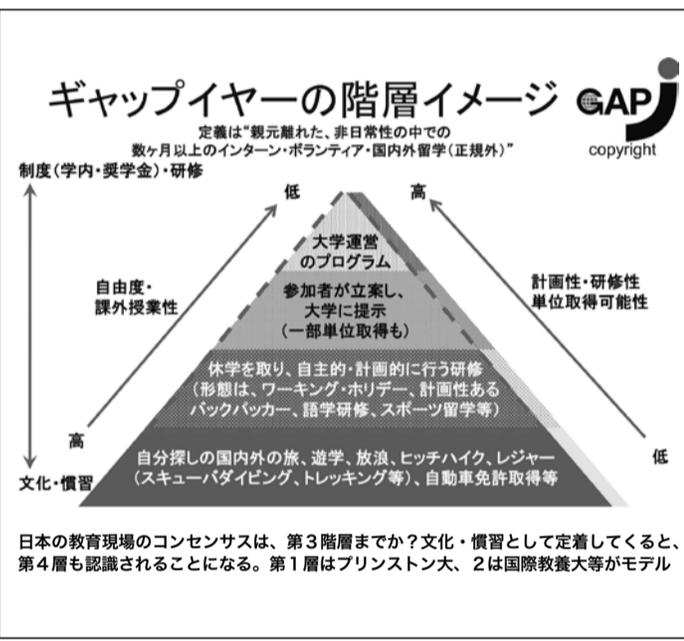
公立大学「国際教養大学」のように、入学を10月に遅らせるが、4月から9月までの半年間を単位としてGYに充てることのできるものもある。必ずしもGYイコール休学ではない。東大も、この「国際教養大学」をひとつのモデルとして検討している可能性がある。

活動は国際協力

ギャップイヤー経験者(Supper)はどんな活動をしているのか。国際教養大学のW君は、「住民参加型地雷除去作業」を行っている認定特定非営利活動法人日本地雷処理を支援する会(JMAS)の協力を得て、カンボジアで研修を受けた。研修内容は、地雷原での地雷や不発弾の除去作業の見学、井戸掘り作業の補助、村として行っていたゴミ削減活動への参加、単身ホームステイによる住民との交流など多岐にわたる。内容は濃い活動が出来た。研修前は発展途上国であるカンボジアの人々に対

し、「貧しい生活を送っているかわいそう」というイメージをもっていたが、研修後、その見方が変わったという。18歳の彼の目にはカンボジアの人々が毎日いきいきと過ごしているように映り、「かわいそう」という感覚は違う、また表現としてふさわしくないとも思った。実際に異国の地で研修を受け、日本という国から出たことのない自分「自分の常識」という尺度とは全く違う、もう一つの尺度に出会うことができ、今まで漠然とした概念でしか捉えることができなかった「世界が広がる」感覚を実感できたという。

GYはもともと1960年代に英国発祥の慣行といえるが、現在では英国圏だけでなく、イスラエルや欧州各国、それに近年ハーバード大、MIT、プリンストン大等、名立たる米国の高等教育機関でGYが推奨されたり、大学の制度(ギャップイヤー取得の奨学金や特別プログラム立案)として定着してきた。



大学就学前に一息

GYには、この国の若者の「留学行けない、行かない、海外駐在お断り」の内向き志向が顕在化する中、若者に希望を与え、元気に「外向き」にいきたいとさせる予感がするからである。先述の経団連の提言では、以下の表記がある。「英国等では、大学入学前もしくは卒業後に、学生がGYを取得し、(中略)国内外でボランティア活動や社会貢献活動をして過ごすことが推奨されている。わが国でも、学生が国内外で本格的にボランティア活動等に従事できるよう、(中略)企業側には、そうした学生の多彩な経験を採用活動において積極的に評価する姿勢が求められる」

これまでの「休学・留年等空白のない、減点法の履歴書重視」の20世紀型人材評価から、若者の社会体験・就業体験活動も評価する加重点の複線型評価へという画期的な路線変更と捉えることができ、経団連のこの考え方は評価したい。あとは、傘下の企業がどうこの考えを実行するかである。閉塞感ある日本に、東大など主要大学が、入学試験は従来通り1月から3月で、秋入学とGYをセットにするのと、「画一的な高等教育や履歴書の空白を嫌う人材評価、就活・新卒一括採用」が化学変化をきたし、今後の日本がグローバル社会で生きていくためにもっとも重要な要素であるダイバーシティ(多様性)という概念を習得するかもしれないGYを語る時、そのような道筋のワクワク感があるのが特徴的だといえる。